

# PROFILE

## 橋 谷 光

名古屋市立大学大学院医学研究科細胞生理学分野



昨年11月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科細胞生理学分野の教授に就任致しました。

九州大学医学部卒業後、泌尿器科に入局し2年間の臨床研修の後、学部時代から指導を受けていた前任の鈴木光先生（名誉教授）とのご縁により名古屋市立大学大学院に入学、以来計4年半の留学期間を除き名古屋在住です。

私はM1、M2（今のM3、M4）を2年ずつやった劣等生ですが、その間骨格筋の研究ではなく鍛錬に励んでおりました。ダブルスプリットルーティンで練習して超回復の原則に従い昼間休息を取っていたので、学業成績は骨格筋の肥大以上に正直な反応を呈しました。充実した日々ではありませんでしたが、今思うといかに「猫に小判」とはいえ惜しい事をしたもので、大村裕教授、赤池紀生助教授（生理学1）、野間昭典教授、顕原嗣尚助教授（生理学2）そして故栗山熙教授（薬理学）と、生理学を学ぶ者には願ってもないような大先達が揃っていたにもかかわらず、この時期しっかりと生理学の足腰を鍛錬しなかったことが今にまで崇めているような気もします。その後栗山先生の教室の門をたたき、鈴木先生の御指導のもと血管平滑筋の内皮依存性弛緩についての実験を始めたことが、平滑筋研究の出発点になりました。

細胞生理学という分野名は、現在の主流である分子生物学的手法を用いた細胞・分子レベルでの研究を想像させますが、実際には多様な細胞の機能的連携により成り立つ組織標本を用いて、細胞内電位記録法、細胞内カルシウムイメージングなどの機能実験を行っております。平滑筋には内臓平滑筋に代表されるように自動運動を有するもの

が少なくありませんが、その自動運動の発生機構の解明を主要な研究テーマとしております。研究（資金配分）にも極端な流行があり、またインパクトファクターなどの素人受けする数値指標が研究者の評価につながる傾向がある昨今、個人商店規模ではありますが淘汰されずに自分の興味のある研究内容が続けてくる事が出来たのはほんとうに幸せなことだと思います。研究の主流が変遷し、新たな研究手法が加わることは当然であり結構なことですが、それと同時に「古い」手法や「少数派の」研究領域が蔑ろにされることは避けたいものです。平滑筋機能研究においては、平滑筋細胞自体の収縮性とその神経性制御に加え、内皮・上皮細胞さらには間質細胞と呼ばれる多様な細胞群が重要な役割を果たしていることが明らかになっています。培養細胞を用いた研究や異所性に発現させたイオンチャネルの機能解析はあくまでも「参考記録」であり、臓器特異的な平滑筋機能の理解にはそうした手法をもっては代え難い組織レベルでの研究が必須であると考えて今後も研究を継続、発展させて行きたいと考えています。しかし仮に定年まで生きながらえた時、平滑筋の細胞内電位記録がまともにやれる研究者が世界中に何人いるのだろうと想像するのは恐怖ですらあります。若い研究者の中から流れに乗らない変わり者が出る事を期待しています。

### 略歴

1991年3月 九州大学医学部卒業  
1997年3月 名古屋市立大学大学院医学研究科修了

1997年6月	メルボルン大学動物学 訪問研究員		Visiting Research Fellow
1998年1月	NHMRC Research Officer(メルボルン大学)	2003年6月	名古屋市立大学医学研究科講師 (細胞生理学分野)
1999年9月	名古屋市立大学医学部助手(第一生理学教室)	2008年8月	同上 准教授
2000年12月	オックスフォード大学薬理学	2010年11月	同上 教授